

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 85

June, 2026

関西大学ニュースレター

発行日：2026年(令和8年)6月30日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
www.kansai-u.ac.jp

国際協力×Smile 「教育」で支える子どもたちの笑顔と未来

● 共に歩む支援のかたち

■ 特集

藤原 紀香

・特定非営利活動法人「Smile Please ☆世界子ども基盤」主宰
俳優・関西大学客員教授

■ 特集 ー1

■ リーダーズ・ナウ ー7

卒業生 ー La Luna 旧中川邸 代表(一般社団法人月心 代表理事)
福本 久美 さん

大阪府立特別支援学校 教諭 山本 良幸 さん

在学生 ー 文学研究科 総合人文学専攻 国語国文学専修
博士課程前期課程 2年次生 ポルチェンコ・マリア・ソフィアさん

理工学研究科 環境都市工学専攻 都市システム工学分野
博士課程前期課程 1年次生 マイサム・バンカスリさん

児童文化実践サークル「うぶ」

■ 研究最前線 / Research Front Line ー17

国際化政策論の研究
国際協力活動における理論と実践のリンケージ
国際部 ー 澤山 利広 教授

・Bridging Theory and Practice in International Cooperation
Division of International Affairs ー Professor Toshihiro Sawayama

■ トピックス [学内情報] ー21

関大愛全開！ 全国に関大の魅力を伝えたい
山里亮太さんが「卒業生アンバサダー」に就任 ほか

■ 関大ニュース ー23

日本初、グリーンエレクトロニクス工学科を開設 ほか

■特集

国際協力×Smile

「教育」で支える 子どもたちの 笑顔と未来

◎共に歩む支援のかたち

藤原 紀香

・特定非営利活動法人「Smile Please ☆世界子ども基金」主宰
俳優・関西大学客員教授

華やかな芸能活動の一方で、20年以上にわたり世界の子どもたちを支え続けてきた藤原紀香さん。阪神・淡路大震災での経験を原点に、紛争や災害に苦しむ地域で支援活動に携わってきた藤原さんに、その経験、そして「教育」に込めた思いを聞いた。



アフガニスタン・カブールの識字学校

◆活動の原点は阪神・淡路大震災

— 関西大学から客員教授就任の依頼があった時は、どのようなお気持ちでしたか？

お話をいただいた時は「私には分不相応で、お受けできません」と一度お断り申し上げたのですが、大学側の思いを聞くと、24年間続けてきた私のライフワークでもある支援活動の経験などを学生たちに共有してほしいというお話でしたので、「私の経験がお役に立ちますならぜひ」とお受けしました。関西大学の学生さんたちとのご縁を大切に、交流を重ねたいと思っています。

— 国内外でさまざまな支援活動をされていますが、きっかけは何だったのでしょうか？

1995年阪神・淡路大震災が起り、大学の卒業生や友人たちと避難所でのボランティア活動をしていたときのこと。著名な方々が応援に来てくれて、弾き語りで元気づけてくれたり、炊き出し



をしてくれたり。寒さに耐えていた高齢の方や復旧活動で疲弊していた皆さんが「私たちは忘れられてないんだね、頑張ろうね」と高揚した様子で、彼らが帰ったあとも話に花が咲き、明らかに避難所の雰囲気も変わりました。私はその時、彼らはテレビや映画や舞台で人を楽しませるだけではなく、その現場に、光のような元気やあたたかさを届けることができる存在なのだと感動しました。

実は、以前から私の夢は両親に反対されていましたけれど、私は、このことをきっかけに、今は親にも反対されているけれど、もし自身の夢が叶えられたら、エンタメの世界で表現するだけではなく、少しでも人や社会の役に立てるように頑張りたい、と心に誓い、「何も援助はいらないから、自分の力で挑戦したい」と両親に伝え、上京を決意しました。

◆9.11以降の戦禍を経たアフガニスタンへ

— 芸能活動は最初から順調だったのでしょうか？

いいえ。いろんなオーディションに落ちましたし、貯めていたお金もすぐに無くなり、五畳一間の一人暮らしの日々が続きました。夢が叶えば、人の役に立てることをしようと思っていたのに、もう自分のことで精一杯で、何も行動できず葛藤の日々でした。被災した兵庫の友人たちと連絡をとるたび、「彼らも頑張っている。まだまだ私もやれるとこまでやる！」と、奮い立たせながら生きていました。

そして、ようやく一歩ずつ階段を登り、連続ドラマの主演などを務められるようになったころ、9.11アメリカ同時多発テロ事件が起こりました。

ニューヨークには語学留学のため、都度、お世話になっていたホストファミリーがいました。彼らの無事を確認し安堵した反面、その後、渡航した際、優しかった家族がアフガニスタンへの報復を当然だと話していたことに複雑な思いを抱きました。戦争は無関係の市民や子どもたちを巻き込んでしまいます。現場でしか分

からないこともたくさんあるのだと、震災からの思いもあり居ても立っても居られず、戦争直後の一般市民の現状を伝えたいと考え、ドキュメンタリー番組の企画書を自ら作りテレビ局に提出しました。

— 当時のアフガニスタンは、渡航すら危険な状態だったのではないのでしょうか？

戦争が終わったとはいえ、テレビ局からは最初「女優さんをアフガニスタンには連れていったことがありませんので」と断られました。その後、セーブ・ザ・チルドレンさんが救援物資を届けるルートなら同行許可が下りるといふことになり、渡航を決意。マネージャーもスタイリストもメイクさんももちろんいません。局のスタッフさんは有志、そして、私と、1人アフガンの言葉を英語に訳してくれる通訳の方も一緒に行ってくれました。彼女は幼い頃、アフガニスタンから父と2人で亡命をし、日本にたどり着いたアフガンの人でした。

■特集

—アフガニスタンではどのような様子でしたか？

渡航前に受けたセーブ・ザ・チルドレンの講義で、以前のアフガニスタンの街はパリのシャンゼリゼ通りのように華やかで栄えていたと聞いていましたが、現地にその面影は一切ありませんでした。到着したカブール国際空港には爆撃を受けた飛行機がそのまま横たわり、外に出れば軍用ヘリが轟音で機銃掃射をしながらパトロール、街を歩けば、行く場所がなく、今にも崩れそうな建物に住んでいる人たちもいました。現地の人たちは復興に対する余力さえなく、その日を生きることに必死でした。

—アフガニスタンではどのような場所に赴かれたのでしょうか？

カブールの識字学校や、赤十字国際委員会が運営する義足センター、国連が支援していたテントで作られたバーミヤンの学校などを訪問しました。おもちゃに見せかけた地雷で手の指を失ってしまった女の子や、脚を失い義足で懸命にリハビリに励んでいる子どもたちにも多く会いました。アフガニスタンには、当時、約1,000万個以上の地雷が残されているとも言われていました。地雷区域を示す赤い石も道路の至る場所にあり、学校では子どもたちに危険性を教える地雷教育も行われています。しかしそれだけでは防ぐことはできず、多くの子どもたちが残留地雷の被害に遭っていました。



1,2 地雷の危険を知らせるため赤と白に塗られた標石の中を歩く人々。赤側は危険、白側は安全であることを示している
3 赤十字国際委員会が支援する「義足リハビリセンター」。ここで働くスタッフの多くは義足の使用者
4 センターで製作された義足
5 リハビリに励む片足が義足の3歳の少年
6 地雷教育を受ける子どもたち



廃墟と化したアフガニスタンの町並み

空港に横たわる破壊された飛行機

道路中央に放置された不発弾

—出会った子どもたちはどのような様子でしたか？

学校では子どもたちと一緒に遊んで話をし、積極的にコミュニケーションをとりました。日本という遠い国から来た見ず知らずの私に「遊ぼう！遊ぼう！」と懐いてくれる。皆笑顔が可愛くて、勉強がしたい、学校に行きたいと話してくれました。なけなしの水でチャイを入れてくれたり。とても心優しい子どもたちでした。

アフガニスタン最後の日、名残惜しい気持ちを抱えながら帰道歩き始めた時、彼らが追いかけてきてくれたことは今でも忘れられません。どんなことがあっても子どもたちの前では泣かないと決めて旅を続けていましたが、その姿を見て自然に涙が溢れて出てしまいました。「カンダクウ、クダハフィス(笑顔で、さようなら)」と言ってくれた。美しいその言葉が忘れられなくて、アフガニスタンで撮影したチャリティー写真集のタイトルにしました。



خنده کن カンダクウ—笑顔で

◆アフガニスタンでの活動から世界へ

—ニューヨークでも写真展を開催されたそうですね。

2004年にニューヨークの日本クラブで写真展を開催しました。その際、偶然私の写真集を手にとってくださった国連の方のつながりから、2006年3月、インドネシアから独立したばかりの東ティモールへの視察にカメラマンとして同行することになり、同年5月には国連本部で、撮影した写真の写真展を行いました。ノーベル平和賞の受賞者である東ティモールのラモス=ホルタ大統領も出席してくださいました。その後、コフィー・アナン国連事務総長(当時)にお会いすることができ、各国大使が集まる国連本部で世界の子どもたちについてのスピーチをする機会もいただきました。

アフガニスタンの他にカンボジアへも何度も訪れています。カンヌ国際映画祭で知り合ったアンジェリーナ・ジョリーさんや、お世話になった映画監督に勧められたことがきっかけです。カンボジアにも、ベトナム戦争の残留地雷で被害に遭った子どもたちや、貧困や親の麻薬犯罪によって孤児院に入っている子がたくさんいることを知り、胸を締め付けられました。

◆子どもたちへの「教育」支援の必要性

—子どもたちへの「教育」の支援に力を入れているのはなぜでしょうか？

さまざまな国で子どもたちと話をした時、私の耳に届いていたのは、どんな過酷な環境下でも「学びたい」「学校に行き、友達をいっぱいつくりたい」「読み書きを学び勉強して先生になりたい」—そんな声で溢れていました。生まれた環境によって選べるはずの未来が閉ざされ、学校にも行けない子どもたちがいる。彼らの未来に選択肢を増やすお手伝いがしたいと思いました。「学びたい」という気持ちに応え、そして学ぶことで、彼らの未来の選択肢も少しは増えるはずだと信じています。

亡き小山内美江子先生が率いていた「JHP・学校をつくる会」が、カンボジアにたくさん学校建設をされていたので、豊富なノ

ウハウをお持ちだったことからご協力を仰ぎました。最初はアフガニスタンにアンダー女子小学校をつくりました。チャリティー写真展や講演会を24年間細々と続けてきて、多くの方々と協力し合いながら、カンボジアやネパールなど合計6つの学校をつくり、現在も支援を継続しています。

—学校での子どもたちの様子はいかがですか？

本当に喜んで学んでくれているようです。一番忘れられないのは、開校式で「学校をつくってくれた日本の人たちにお礼の気持ちを伝えたいけど、私たちには差し上げられるものが何もない。だから日本の歌を歌います」と、『ふるさと』を日本語で歌ってくれたこと。こんなにも心が温くなった贈り物は初めてで、とても感激しました。

また、2008年に完成した学校に、15年後に調査で再訪した時、私の肩を叩いて「私に見覚えありませんか？」と声を掛けてくれた若い女性がいたのです。その笑顔には15年前の開校式で元気に生徒代表挨拶をしてくれた少女の面影があり、本当に驚きました。「日本の皆さんが建ててくれたこの学校を卒業した後、夢を叶えて先生になり、ここで働いています」と聞き、胸がいっぱいになりました。

ボランティアやチャリティーといった活動は結果が目に見えないことも多いです。しかし、地道に活動を続けていると、このような素敵な出会いに恵まれることがあります。「継続は力なり」なのです。校舎を建設して終わりではなく、その後の文具や図書を補充したり、建物の修繕であったり、開校後も継続的なメンテナンスとアフターフォローを行っていくことが重要だと感じています。また、こうした取り組みを引き継いでいく必要性も、日々強く感じています。



▲2008年に建設したカンボジア・プレイベン県、メーサン小学校で学んだ生徒のソビアクさん(左)は現在、母校に戻り教師となった

特集



こちらからの一方通行の支援ではなく、共に歩むという気持ちが大切。

◆新たな一歩に寄り添う支援

—藤原さんの考える「支援」の本質を教えてください。
 まず支援というのは、物資や資金を届けばそれでいいということではないと思っています。東日本大震災の時に日本赤十字社の方と福島へボランティア活動で通っていた際、現地の学生たちが「たくさんの方が助けてくれましたが、僕たちがこの町に戻って何が出来るかを考えて、しっかりやっていかなければいけないと思っています」と力強く話してくれたことがあります。
 また、ハリケーンの被害に遭ったバングラデシュで支援物資の希望を聞き取りした際には、若い女性の「私たちは人に頼ってばかりではいけない」という言葉を発端に、「このままでは自分たちの村は元気にならない」「一生懸命に外国の方が助けてくれているのだから、自分たちも頑張らない」といった声が周囲に広がっていきました。
 彼らの言葉を聞いて、新しい一歩を踏み出す力を湧き起こしてもらうことが支援で最も肝心なことだと気付かされました。そのため、こちらからの一方通行の支援ではなく、共に歩むという気持ちが大切。もちろん物資や資金も大事ですが、それ以上に、相手の声に耳を傾け、寄り添い、心を通わせ、そっと背中を押せる姿勢が必要だと考えています。そして、こうしたかかわりをサステナブルに続けていくことで、本当の意味での支援の力が生まれるのだと思います。
 —支援活動というと、「自分に何が出来るのだろう」と足踏みしてしまいがちです。
 私が活動経験をお話すると、「私は何をすればいいですか?」と聞かれることがよくあります。しかし、そこに正解はありません。私自身も、社会や日本、世界の中で何か役に立てればという思いか

ら、自分にできることを地道に続けてきました。ですが、どのような立場で、今何が出来るか、その可能性は無限ですし、一人ひとり異なります。だからこそ、どんなに小さなことでも、それぞれが自分の役割の中でできることに取り組めばよいのだと思います。

◆NPO法人「Smile Please」に込めた思い

—藤原さんが発起人のNPO法人「Smile Please」について教えてください。
 私が初めてアフガニスタンへ行くきっかけとなったのは、ドキュメンタリー番組制作のチームでしたので、番組の完成とともにそのチームは解散となりましたが、現地を目にした状況を思うと、私はそれで終わりにすることはできませんでした。「支援活動を続けたい」という思いから、このNPOを立ち上げました。
 —具体的にはどんな活動をされているのでしょうか?
 現在は、仕事ではないライフワークとして、国内外を問わずチャリティー講演会や写真展を開催しています。講演会での私の話から、皆さんが何かを思い巡らせたり、想像を膨らませたりするきっかけになればと願っています。そして、日本だけでなく世界では何が起きているのかを調べたり、「自分にできることは何だろう」と考えたりする—そんな小さなアクションにつながっていればうれしいです。また、会場のほかウェブサイトでも「Smile Please ☆世界子ども基金」のチャリティーTシャツを販売しており、いただいた大切な寄付はすべて、現地の学校建設や運営のために活用させていただいています。

◆経験と出会いから自分の視点を育てる

—支援活動から芸能活動までパワフルにご活躍されていますが、その原動力は何でしょうか?

やはり、支援活動の中で出会う笑顔ですね。人前に入るエンターテインメントの世界にいと、「偽善か!」などという批判的な意見を耳にすることもありますが。それでも、そんな言葉を気にせずいられるのは、自身が実際に現場を見て、体験してきたから。何を言われようと、誰かを少しでも笑顔にできるのであれば、幸せなこと。これまでの24年間の活動を振り返っても、こちら側が励まし、サポートに行っているはずなのに、子どもたちや現地の皆さんから逆に元気をもらう場面が何度もありました。自分の行動の99%が自己満足だったとしても、残りの1%でも誰かの役に立って、笑顔につながっているのだとしたら、最高のことだと心から思えます。
 開発途上国で積み重ねてきた多くの経験が、こうした揺るがない自分の芯をつくってくれています。ふれることのないその思いが、私の原動力の一つになっているのだと思います。



▲3月28日開催のチャリティー講演会「Smile Please〜アフガニスタンで出会い、カンボジアで学んだ『教育と未来』」(校友会主催)で、インドネシア・バリ島の児童養護施設での「国際健康福祉実習」に参加した人間健康学部の学生と交流

藤原 紀香—ふじわらのりか
 ■兵庫県出身。大学在学中に1992ミス日本グランプリを受賞。卒業後に上京し、俳優としての活動を開始。以降、映像・舞台を中心に数多くの作品で主演を務め、CM、司会、声優など幅広い分野で活躍。主な舞台出演作に、『キャバレー』『マルグリット』『南太平洋』『熱海五郎一座』『華の太夫道中』『カルメン故郷に帰る』『サザエさん』『魔界転生』『忠臣蔵』など。また人気作にも恵まれ、今夏はフランス戯曲の傑作サスペンスの舞台『異』(7/4・5 森ノ宮ピロティホール)、そして北条司原作漫画『キャッツ♥アイ』の舞台化となる『メイジ・ザ・キャッツアイ』(11/14~23 大阪新歌舞伎座)が今秋に決定している。芸能活動のみならず社会貢献活動にも長年取り組み、自身のNPO法人「Smile Please ☆世界子ども基金」の活動を通じてアフガニスタンやカンボジアなどの開発途上国で学校建設を行い、子どもたちへの教育支援を継続。2025年大阪・関西万博日本館名誉館長。2026年度関西大学客員教授。

—最後に学生たちにメッセージをお願いします。
 学びの時間というのは知識を得るだけでなく、自身の考え方や価値観を育てる大切な時間だと思います。そんな学びには一つも無駄はありませんし、学生時代に出会う人や経験は、自身の軸を作る大きなきっかけになります。社会に出ると、重要な選択をしなければならないことがたくさんありますが、その時に大切なのは、これまでの生き方において現場で得た知識であり学びであり、どう考え、どう感じてきたかという自分の経験です。ぜひ一つひとつの出会いや経験に対して丁寧に向き合いながら、多くのことを吸収して自分なりの視点を育ててほしいと思います。
 目先のことでなく、世の中で起きていることにも視野を広げてほしいですね。きっとそれが自身の歩みを支え、誰かのための行動へとつながっていくはずです。皆さん一人ひとりの歩みが、豊かで実りあるものになることを心から願っています。

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [卒業生インタビュー]



今いる場所での積み重ねが、
思いがけない未来につながる。

福祉の灯りが ともる場所



「Just Be.」を受け入れる共生社会へ

● La Luna 旧中川邸 代表(一般社団法人月心 代表理事)
福本 久美さん —文学部 1998年卒業—

兵庫県西部、たつの市にある龍野城下町は、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。その一角で2025年11月にオープンした「La Luna(ラ・ルーナ)旧中川邸」を経営する、地元出身の福本久美さん。お店はレトロカフェとして人気を博す一面、福祉カフェとしての側面を持ち、多様な人たちの居場所となっている。カフェオープンまでに至った彼女の道のりを聞いた。



●多くの出会いと経験を重ねた大学時代

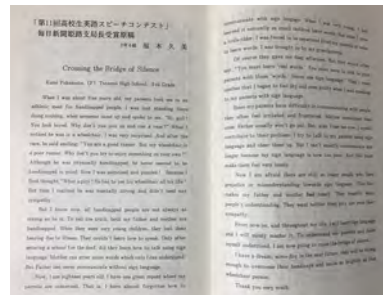
明治時代に建てられ、かつては産婦人科だった建物をリノベーションした「La Luna旧中川邸」。ハンディキャップがある人たちが気兼ねなく足を運べる場所にしたい、そんな想いを込めた福祉カフェだ。運営する一般社団法人「月心」を立ち上げたのは、たつの市で生まれ育った福本久美さん。「開店した時、お客様同士が手話で楽しそうに話されていて、思い描いた通りの光景に感激して涙が出そうでした」。

日本人初の国連難民高等弁務官である緒方貞子さんに憧れ、高校時代は国際協力の道を目指して勉強していたものの、家庭の事

情で進路を変更することに。当時、福本さんの頑張る姿を見ていた先生が関西大学文学部の英文学科(当時)を勧めてくれた。

実際に関西大学で学び始めてみると、多岐にわたる分野の文学を教材とした授業は楽しく、言語学のゼミでもその奥深さに夢中になった。一方でテニスサークルとツーリングサークルを掛け持ちし、アルバイトをしたり、英会話スクールにも通ったりと忙しい日々の中でたくさんの出会いと豊かな経験に恵まれた大学時代はととても貴重な時間だったと振り返る。

「心をフルオープンにして知らない世界へ飛び込んだからこそ、今まで気付いていなかった新しい自分を知ることができました。世界が広がるってこういうことなんだ!と身をもって体験できた4年間でしたね。」



英語と多文化への関心の原点となった高校時代のホームステイ



ツーリングサークルの仲間たち



学部の友人たちと大学の卒業式で

◀高校生の時に聴覚にハンディキャップのあるご両親への思いと決意を書いた英語スピーチコンテストの原稿。この時の思いが時を経て今も続いている

●作業療法士として認知症患者の地域支援へ



(上) フィリピンを再訪問した際に過ごした村の人たちとともに (下) 村にお金が循環する仕組みの一環としての豚バンク事業を支える養豚場づくり

就職活動をはじめることになった3年次生の頃、訪問した国際協力関連のNGO団体でフィリピンへのスタディツアーに誘われて参加したことが、その後の人生を大きく変えることになった。

「見学した現地の療育施設にアメリカから作業療法士のインターン生が研修に来ていたんです。彼らが提供したゲーム療法を通じて、疲れた表情だった施設の親子たちの目に輝きが戻り、笑顔になるのを見て『なんて素晴らしい仕事なんだろう!』と感動しました」。

自分も人を笑顔にする仕事に就きたいと、作業療法士への道に進むべく関西大学卒業後、専門学校を受験。無事合格し、作業療法士として病院の認知症病棟や老人保健施設でキャリアを重ねた。たつの市で認知症地域支援推進員として働いていた時、認知症患者や家族からの相談を受ける度に感じるがあった。「若年性認知症の方は特に、退職してしまい生活に困ってからや、問題が大きくなってから相談に来る方が多いんです。もう少し早く相談してくれていれば対応出来ることも多いのですが、相談先が行政や病院だと気後れしてしまう。だからもっと気軽に話せる場所があればと思っていました」。

●50歳を機に想いを詰め込んだ場所を

そこで福本さんは「自分が50歳になったことを機に、他にやってみたかったことを全部詰め込んだ場所を作ろう」と一念発起。一つは認知症の患者や家族が気軽に話ができる場所づくり。そしてもう一つは手話の啓発活動。耳が不自由な両親を持つ福本さん自身も幼い頃から手話を使っていたこともあり、ハンディキャップがある人たちの居場所を作りたいと考えていた。またアレルギーを持つ自身の娘のために食について長年勉強しており、食材や調理法にこだわった食事を提供したいという気持ちもあった。

もともと旧中川邸は「多世代交流カフェ」で、推進員として足を運んでいたこともあった。その後、閉店のお話を聞き受け継ぐことに。他の地域に安価で借りられる物件もあったが、両親をずっと助けてくれた地域、自分を支えてくれた地元へ恩返しをしたいという気持ちを大切に。一般社団法人「月心」を立ち上げ、新たなカフェが無事オープンの日を迎えたのは2025年11月。「ハンディキャップのある方は、外出してお店に入っても気を遣うことが多いですが、ここだと気軽に来られると、いろいろな方が足を運んでくれています」。

手話ができるスタッフの名札には「手話」と書かれており、耳が不自由なスタッフも臆ることなく笑顔で働いている。「今後はハ



▲こだわりの素材とアレルギーに配慮した心と身体に優しいメニュー



共にお店を支えてくれる大切なスタッフたちと



▲スタッフの名札に「手話」という文字の横には会話レベルを表す絵文字が書かれている

認知症地域支援推進員時代に支援していた方々が常連さんとして訪れる

ンディキャップがある人もどんどん起用していきたい。法人を立ち上げたのも、就労継続支援B型事業所も併設して運営していきたいと思ったからです。県からの認可も無事下り、今後はカフェの裏にある畑で料理に使用する野菜の栽培や、導入予定の焙煎機でコーヒー豆の焙煎など、ハンディキャップのある人たちが笑顔でいろいろな仕事にトライできる受け皿にもなりたいと夢は膨らむ。

●心を開いて向き合えば世界は広がる

カフェの運営を始めてからしばらく経った。「背景やコミュニケーション方法も違う人たちの、真の共生社会は本当に可能なのだろうか」と立ち止まることもあります。けれど「Just Be.(ありのまま)」をお互いが受け入れ合うことができれば、きっと可能になると信じています。それに気付かせてくれたのは、たくさんの出会いに心を開いて向き合い、世界を広げることができた大学時代でした」。

カフェには大学時代の友人も大阪から訪れてくれる。「何事も前向きに楽しみながら自分の道を作っていくと、さらにその先へと道が拓けていくことを体感した4年間でした。私が大学生生活の中で得たことは、自分がどう過ごすかでその場所の意味が変わること。今いる場所での積み重ねが、思いがけない未来につながることもある。学生の皆さんにはそう伝えたいです」。

支援学校の教室から 世界へ挑む

SASUKE完全制覇、そしてオリンピックへ

●大阪府立特別支援学校 教諭
山本 良幸 さん 一人間健康学部 2015年卒業

TBSテレビの人気スポーツエンターテインメント番組「SASUKE」に出場すること7回。同局の『究極の男は誰だ!? 最強スポーツ男子頂上決戦』では、並みいるアスリートを抑えて第14回・第15回と連覇を達成。全国に名を知られる存在となった山本良幸さんだが、普段は特別支援学校で子供たちと向き合う保健体育教員としての日々を送っている。教員を目指した理由、SASUKEに懸ける思い、更には2年後を見据えた新たなチャレンジについて聞いた。



▲勤務先の特別支援学校前で



▲学校で教材を作成する山本さん

LEADERS NOW!



▲「最強スポーツ男子頂上決戦2025冬」で2連覇中



▲「ミスターSASUKE」山田勝己さんと



▲SASUKEのファイナリストになった山本さん

「勉強も部活もボランティアも、どんなことにも、きつと意味があると思います。全てが今の仕事、夢につながっています」

●あこがれの舞台「SASUKE」への挑戦

「番組を録画して何度も見ながら、公園の遊具をコースに見立ててSASUKEごっこをして遊んでいました」。山本さんにとって、SASUKEは子供の頃から憧れの舞台だった。しかしその舞台は遠く、何度も応募を重ねた末、2019年に念願の初出場を果たした。「ミスターSASUKE」ことレジェンド・山田勝己さんが主宰するチーム「黒虎」でトレーニングを積みながら、夢を現実のものにした。以来常連選手となり、着実に成績を伸ばし、「完全制覇」まであと一歩に迫っている。

「昔から体を動かすことが好きだった」という山本さんは幼少期から体操クラブに通い、どんなスポーツも器用にこなした。しかし高校時代、陸上部で厳しい練習による心身への負担から胃潰瘍を発症し、1年生で退部。その後は、「内村航平さんのようになりたい」と体操に打ち込み、関西大学では器械体操部の主将を務めた。

●理想の教員に近づくための回り道

もともと体育教員を志し、保健体育の教員免許が取得できる人間健康学部に進学した山本さん。放課後の学童保育で子供たちと接するボランティア活動を通じて、教員という仕事への思いを強くしていった。しかし、自身が理想とする教員になるためには、まだ学ぶべきことがあると感じていた。「人に伝える力や、人と向き合う姿勢を社会に出て身につけたいと考えました」。山本さんは、一旦はハウスメーカーに就職し、営業職として勤務した。

再び教員への道に戻ったのは、社会人4年目を迎えた2018年。退職後、関西大学の科目等履修生として教職課程を履修し、保健体育の教員免許取得を目指した。学びと並行して、手話や点字サークル、YMCAの水泳教室などでボランティア活動にも積極的に参加。「障がいのある子供たちのサポートを続ける中で、特別支援学校で働きたいという思いが強くなりました」と振り返る。2年間で教職課程を修了し、2020年、大阪府内の特別支援学校に保健体育科教員として採用された。

●できないことを一緒にクリアしていく喜び

普通学校への赴任を希望することもできたが、山本さんは迷わず特別支援学校を選んだ。「知的障がいのある甥の存在や、ボランティア活動を通じて、特別支援学校で教えたいと思うようになりました。子供たちの豊かな感性や発想にも惹かれたんです」。特別支援学校では、身体障がいや発達障がい、知的障がいなど、一人ひとりの特性に向き合う必要がある。「対応する範囲はさまざままで、労力が必要なケースもあります。でも、できないことを一緒に乗り越えていくのが楽しくて」。担当教科は保健体育だが、算数や社会を教えることもあれば、生活面のサポートを担うこともある。

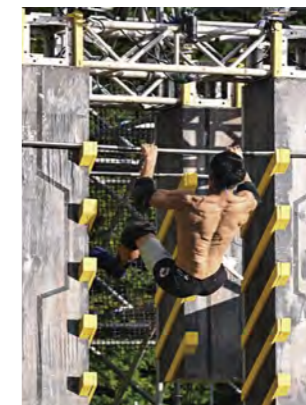
何よりうれしいのは、子供たちの“できた”に立ち会える瞬間だ。「書けなかった字が書けるようになったり、気分のムラが安定して落ち着いてきたり。一見小さなことでも、本人にとっては大きな成長なんです」。卒業生の成長した姿を見ることも励みになっているという。

●ちょっとした工夫で子供たちが変わる

特別支援学校の教員として、山本さんが大切にしていることは2つある。

1つは、子供たちに合わせた工夫をすることだ。「話すのが苦手な子でも、気分が上がるBGMを流すと大きな声が出せたり、おもちゃのプレスレットを付けるだけでヒーロー気分になって行動できたりする。ちょっとした工夫で表情や反応が大きく変わるんです。「できない」で終わらずに、苦手なことに向き合う手伝いのできたらうれしいです」。もう1つは、接し方だ。「失敗を頭ごなしに叱っても成長にはつながりません。思いやりとリスペクトを持って、前向きな言葉をかけるようにしています。子供の能力を伸ばし、背中を押せる先生になりたいですね」。

SASUKEでの活躍も、子供たちとの大切なコミュニケーションのきっかけになっている。「皆応援してくれていますし、落水した回は格好の話題になります」と笑う表情からは、子供たちとの日々を心から楽しんでいる様子が伝わってきた。



▲SASUKEのサーモンラダーに挑戦中

●子供たちとの約束！ 目指すはオリンピック

そして今、山本さんは子供たちに「チャレンジすることの大切さ」を身をもって示している。「近代五種でオリンピックを目指しているんです」。2028年ロサンゼルス大会からは種目の中にSASUKEの要素があると知り挑戦を始めたが、「実際には勝手が違いました」。思うように結果が出ない時期もあったが、現在は国内ランキングもアップしており、2つしかないオリンピック出場枠を目指して、仕事と両立しながら練習に取り組む日々だ。「1週間のトレーニングをSASUKEと近代五種とで分けています。完全オフの日はなく、何かしら体を動かしていますね。子供たちにも「挑戦する！」と宣言した以上、途中で投げ出すわけにはいかない。応援してくれる人もたくさんいますし、やり切りますよ」。

子供たちを導く理想の教員、SASUKE完全制覇、そして近代五種でのオリンピック出場という、人生の目標に邁進する山本さん。その原点には、関西大学で過ごした学生時代があると話す。「勉強も部活もボランティアも、どんなことにも、きつと意味があると思います。全てが今の仕事、夢につながっています」。これこそ、山本さんが後輩に届けたい思いだ。「今、悩んでいることや、つまらないと思うことにも向き合えば、全て力になるし、必ず得るものがある。できることは全てポジティブにチャレンジして、大学でしかできない経験をしてほしいですね」。

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生インタビュー]

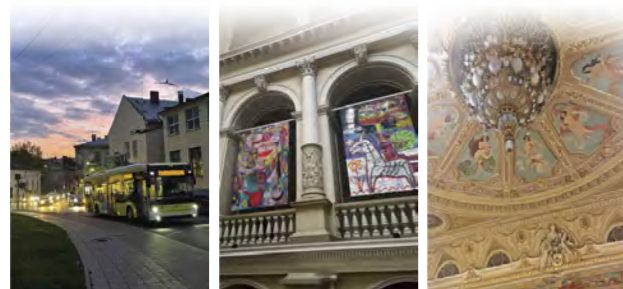
ウクライナへの想いとともに、日本で切り拓く未来

—現代日本文学の魅力を探究

●文学研究科 総合人文学専攻 国語国文学専修
博士課程前期課程2年次生
ポルチェンコ・マリア・ソフィアさん

いまだ戦禍が収まらないウクライナから、憧れていた日本へ留学中のポルチェンコ・マリア・ソフィアさん。UNHCR 難民高等教育プログラム(RHEP)*の支援を受け、関西大学で日本文学の研究をさらに深めている。日本での暮らし、祖国ウクライナにいる家族や未来への想いについて話を聞いた。

*「UNHCR 難民高等教育プログラム」(Refugee Higher Education Program : RHEP) 国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) と特定非営利活動法人国連 UNHCR 協会 (2025 年 10 月から一般社団法人 RHEP 難民教育推進協会に運営移行中) が運営する、難民が大学や専門教育を受けられる機会を提供する、日本独自の支援制度。プログラムを実施するパートナー大学は、全国で学士課程 15 校、修士・博士課程は 7 校 (関西では関西大学を含め 2 校)。



▲ソフィアさんの出身ウクライナ西部の都市リヴィウの街並み (写真左) とウクライナ・リヴィウ国立大学 (写真中)、リヴィウ・オペラ・バレエ劇場の天井画 (写真右)

●2度目の日本留学で関西大学へ

ロシアがウクライナへの侵攻を開始したのは2022年2月。祖国を離れて関西大学に留学中のポルチェンコ・マリア・ソフィアさんは、「日本にいても、打ち上げ花火の音が聞こえてくると、爆撃の音のように感じる時があります。だいぶ慣れてきましたが、今でも少し不安になります」と話す。

ウクライナのイヴァン・フランコ記念リヴィウ国立大学文学部でソフィアさんは、日本語・日本文学及びウクライナ語・ウクライナ文学を学んだ。「在学中は言語学習と文学研究の両方に取り組み、特に日本語と日本文学を中心に専攻しました」。三島由紀夫の『金閣寺』や芥川龍之介の『羅生門』など、ウクライナ語に翻訳された日本文学にも数多く触れ、特に近代文学に熱心に取り組んだという。「言語としての日本語がとても好きです。発音も覚えやすいですし、漢字を覚えることがすごく楽しい。授業でつまらないと思ったことは一度もありません」。



▲関西大学のキャンパスで学びを謳歌するソフィアさん

柔道経験のある父親から日本の歴史や文化について話を聞き、日本には幼少期から興味を持っていた。初めて来日が実現したのは2022年10月、リヴィウ大学を1年休学して茨城キリスト教大学に留学した。

茨城キリスト教大学では日本映画を鑑賞して日本語でレポートを書いたり、英語の授業ではスタッフとして教員のサポートをしたり、留学生として充実した毎日を送った。「留学するまで家族と離れて暮らしたことがなく不安でしたが、友人もたくさんでき、プライベートの時間も楽しく過ごすことができました。日本で多くのことを学び、自分自身の成長も感じる事ができた貴重な経験でした」。

リヴィウ大学卒業のため一度ウクライナへ帰国した後も、再び日本への留学機会を探していたソフィアさんは、関西大学の特別聴講生として再来日し、半年間にわたり授業を履修。「また、聴講生として大学院進学を見据え、増田周子先生のゼミに参加したほか、関西大学の先生や国際部の方々のご支援のもと、日本語学習の機会もいただきました。こうしたご配慮により、日本語能力の向上につながる貴重な学びの機会となりました」。

●「学びたい」という思いを抱く人々を支援

「自然と大学院進学を考える中で、関西大学の国際部の方から RHEP というプログラムを教えてくださいました。戦争によって住む場所やパスポート等の身分証明も失い、最低限の物だけを手に国外へ避難せざるを得ない——そうした極限の状況でも、「学びたい」と思う人々のための支援があることに心を動かされました。私の家はウクライナにまだありますが、戦争は今も続いています」。

RHEPの受験を決意したものの、準備や試験は想像以上に大変だった。日本語能力試験 (JLPT) のN2を取得済みで文法には自信があったというソフィアさんだが、試験では最難関のN1レベルの日本語や難解な漢字も多く出題されたという。「私は心配性なので、試験結果を聞くまでずっと不安でした。合格と知った時は、うれしいより先に驚いてしまって。母に伝えると『私の娘は素晴らしい!』と喜んでくれて、本当にうれしかったです」。

●日本近現代文学を読み解く

現在は文学研究科に在籍し、日本近現代文学をテーマに、作品世界を丁寧に読み解く研究に没頭する。研究題材に選んだのは、『君の隣をたべたい』で有名な住野よりの長編小説『また、同じ夢を見ていた』。「小説の中で特に心に響いた『皆、違う。でも、皆、同じなんだ』という言葉がキーワードに研究を進めています。比較的新しい作品のため先行研究が少なく、自分の分析や考察が新たな発想へとつながるかもしれないと、やりがいを見出しています」。



▲指導教員・増田周子教授 (文学部) の「日本近代文学研究」を受講



▲日本語の勉強ノート

関西大学の国際学生寮で暮らすエジプト出身の留学生と

キャンパスでは特に図書館の地下書庫がお気に入り。お金がない時には大学の「100円朝食」も利用しています。最近はティーチング・アシスタント (TA) として授業の補助もしていますが、学業に専念できる環境には感謝しかありません」。

関西大学の国際学生寮「秀麗寮」で暮らすソフィアさんは、同じ寮に住むエジプト出身の留学生と、海やUSJ などへ出かけることもあるという。ライブ等を運営するイベント会社でサポートスタッフとしてアルバイトに励むほか、関西大学にゆかりのあるウクライナ出身の力士・安青錦関の取組を観戦したり、大阪・関西万博で開かれた平和と人権のトークイベントに登壇したりするなど、日本での時間を豊かなものにしていく。



ポルチェンコ・マリア・ソフィア

■2002年ウクライナ・リヴィウ生まれ。イヴァン・フランコ記念リヴィウ国立大学在学中に茨城キリスト教大学へ留学。リヴィウ国立大学卒業後、関西大学特別聴講生を経て、UNHCR 難民高等教育プログラムに応募し、2025年関西大学大学院に入学。日本語能力試験 (JLPT) N2取得。最近覚えた好きな日本語は「稲穂」「夕風」。

●日本で幸せな将来を見つけるために

2025年の夏、2年ぶりに帰国して家族と一緒に過ごした。今も空爆があれば地下や避難所で怖い思いをしながら夜を過ごす。「しかし翌朝には、皆寝不足のはずなのに、メイクをして服装を整えて、何もなかったかのように仕事へ向かいます」。ウクライナには日常と戦争が混在、隣り合わせの現実がある。「将来、ウクライナでも働くことはできますが、戦争の影響で働く人は少なくなっています。母からは『なぜ日本へ行くの? 私たちと一緒にいればいいのに』と言われますが、一方で『あなたには幸せになってほしい』とも言ってくれます。もちろん私も家族と一緒にいたい気持ちはありますが、幸せな未来を掴むため、日本で頑張りたいと思っています」。

現在は就職活動中だが、「日本は企業が多くて選択肢がたくさん。メディアやエンターテインメント業界に興味があります」と話す。募集の有無に関わらず、関心のある企業には自らコンタクトを取るという。「仕事を選ぶ上では、自分が成長できるかどうかを重視しています。日本で挑戦してみたいことはたくさんあります」と目を輝かせた。

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生インタビュー]



戦禍と震災で荒廃したシリア再建へ 日本で地盤工学を極める

—耐震・防災の最先端技術や理論を研究

●理工学研究科 環境都市工学専攻 都市システム工学分野
博士課程前期課程1年次生
マイサム・バンカスリさん

「明日の命がどうなるか分からなかった」。激戦地となったシリア北部アレッポでの少年時代を振り返るマイサムさんは当時、1年間にわたって水道も電気も使えない過酷な生活を経験した。2023年にはトルコ・シリア地震に見舞われ、地震被害やインフラ崩壊を目の当たりにしたことをきっかけに、防災や耐震分野で高い技術を持つ日本で地盤工学を学ぶ道を選んだ。

現在は、関西大学大学院理工学研究科で斜面崩壊解析やインフラ監視技術の研究に取り組む。「将来はシリアに戻り、戦禍や震災からの復興に貢献したい」。日本で暮らすシリア人留学生に話を聞いた。

●1年間水道も電気も使えない生活

父が自動車販売や不動産のビジネスを手掛ける家で、4人兄弟の三男として育ったマイサムさんの少年時代は戦争の真っ只中だった。アサド政府軍と反体制派との激戦で、アレッポの街は瓦礫と化した。「ちょうど中学生の頃で、1年間、水道と電気が使えない生活が続きました。井戸と発電機が頼りでした」と振り返る。空襲も続き、中学校から高校にかけては学校の授業もまともに受けられなかったという。

「明日の命がどうなるか分からない」という過酷な日々の中、パソコン好きの理系少年だったマイサムさんは、希望するアレッポ大学へ入学し、土木工学を学んだ。「もともと地盤工学に興味がありましたが、シリアも日本と同じように地震の多い国なので防災に役に立つと考えました」。大学ではプログラミングを習得し、地盤の実験データを入力するアプリケーションを開発。手書きでその都度入力していたデータを簡単にレポートや論文に活用し、グラフ化ができるツールだ。



▲マイサムさんが開発した地盤実験データ入力アプリ



アレッポ大学土木工学部

▲戦争の影響で水が張られていない噴水

▲(左)卒業式で角帽とガウンを纏うマイサムさん (右)友人たちと

●「別の惑星」日本で弓道に出会う

大学を卒業し、トルコの不動産会社で働いていた2023年にトルコ・シリア地震に見舞われ、震源に近いアレッポでは多くの建物が倒壊、死傷者は400人以上という甚大な被害を受けた。この震災が、日本で地盤研究の道に進むことを後押しした。

マイサムさんは、幼い頃から日本文化の影響を受けていたという。「中東のテレビでは日本のアニメがアラビア語で放送され、子供たちに人気でした。私も『HUNTER×HUNTER』や『NARUTO-ナルト-』が大好きでした」。アレッポ大学の「学術交流日本センター」で日本文化を学び、アニメクラブにも所属した。メディアでは、日本の最先端テクノロジーや時間に正確な交通機関、ルールを守る人々など、その文化や生活が「まるで別の惑星」と紹介されていて、ますます日本に興味を持つようになったという。

公益財団法人 パスウェイズ・ジャパンのシリア難民留学生受け入れ事業で2023年に初来日。成田国際空港に降り立ったマイサムさんは、街の清潔さや整然とした様子に改めて「凄い」と驚いた。千葉の日本語学校で2年間学びながら、日本の伝統である武道を身に付けたいと弓道を習い始めた。「弓を射る瞬間の静謐さと、精神が統一されていく感覚に魅了されました」と話す。

パスウェイズ・ジャパンからUNHCR難民高等教育プログラムを紹介され、関西大学大学院を受験し見事合格。2026年の春から大阪で暮らし始めた。「東京の人の真面目な印象に比べると関西や大阪の人はオープンで、言葉が分からなくても明るく話しかけてくれて、自分にとっては暮らしやすいです」。

日々の授業に加え、毎週金曜日には大阪市内のムスリム礼拝スペースや茨木市にあるモスクに通い、週末は京都市内の外国人観光客向け弓道体験施設で弓道指導のアルバイトという生活を送っている。アラビア語の他に英語、トルコ語も堪能で、外国人への対応に慣れないアルバイト仲間の日本人学生からも頼りにされる存在だ。



弓を射るマイサムさん。日本の伝統武道を身に付けたいと来日後に弓道を習い始めた

●漢字の専門用語を使いながらの研究

関西大学では、飛田哲男教授(環境都市工学部)の地盤防災工学の研究室に所属。修士論文のテーマは「緩傾斜地盤の地すべりに対するFEM-SPHハイブリッド解析法の開発」で、土壌が崩壊し流体となって流れるプロセスを再現する最新技術を斜面に適用し、モデル化する研究だ。さまざまな条件で実験と検証を繰り返し、より精緻なモデルの構築を目指している。

また、飛田教授と共に、バイブライインインフラの異変を監視するプラスチック光ファイバーセンサーの開発も進めている。地盤をモニタリングする傾斜計や伸長計、ひずみ計といった従来のシ



所属する飛田哲男教授(左端)の研究室で共に学ぶメンバーたちと

マイサム・バンカスリ
■1997年シリア・アレッポ生まれ。アレッポ大学土木工学部を卒業し、トルコの不動産会社で2年間勤務。2023年来日後、千葉・松戸の日本国際工科専門学校(日本語科)で2年間学び、UNHCR難民高等教育プログラムに応募し、2026年、関西大学大学院入学。研究内容は地盤工学。趣味は来日後に始めた弓道で、体育会弓道部にも所属。

ステムには、高コストや設置の複雑さ、電力依存などの課題がある。一方、既に幅広い分野で活用されているプラスチック光ファイバーセンサーは、低コストで柔軟性が高く、電磁界の影響を受けにくい有望な代替手段だ。中東地域にとって重要なバイブライインインフラの異変を高精度に検出できるセンサーの開発により、地下水汚染を引き起こすバイブライイン漏れの防止や、メンテナンス技術の向上などが期待される。

理工学研究科には英語で履修できるプログラムもあるが、日本語での学びを選択したマイサムさん。大学院の授業は、「最初は専門用語の漢字が分からず苦労しました」と明かす。「とても優しく丁寧に指導してくれる」という飛田教授や研究室の仲間との交流や持前のコミュニケーション力を生かし、日本語力を着実に向上させている。

●夢は祖国の大学で後進を育てること

依然として政情不安が続くシリアだが、かつての政権の重圧が薄れ、徐々に治安が回復しつつあるという。難民となっていた人々が帰国するケースも増えており、「海外に住んでいた兄も今はシリアに戻っています」とマイサムさんは話す。荒廃した国の再建には若い世代の力が不可欠だが、これまではそうした労働力となる人々が海外に逃れて、高齢者と子供ばかりの国になっていた。ようやく、国の再建に向けて歩み始めている。

トルコ・シリア地震をきっかけに、被災者支援のために日本在住のシリア人らが設立した認定NPO法人「Japan Bridge」の理事も務めるマイサムさん。祖国への思いは強く、夢は地盤工学の分野で戦禍や震災からの復興に貢献することだ。「関西大学で博士課程後期課程まで進んで研究を深め、その後は日本の企業で実践的な知識や技術を身に付けたい。いずれはシリアに戻り、大学で地盤工学を学ぶ学生を育てたいです」。

苦難を乗り越えてきたからこそ、日本で不安なく研究に打ち込める日々を噛み締めている。



LEADERS NOW!



子供たちに 笑顔と元気を届ける

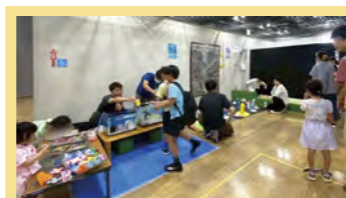
—「うぶ」が紡ぐ温かな交流

●児童文化実践サークル「うぶ」

文学部2年次生
代表 竹下 明里さん (兵庫県立兵庫高等学校卒業)
システム理工学部2年次生
副代表 豎山 幸太さん (阪南大学高等学校卒業)
総合情報学部4年次生
前代表 林 功一郎さん (大谷高等学校卒業)



▲子供向けの自己紹介名札



イベントの様子



現在、関西大学で活動する学生ボランティア団体は7団体。中でも長い歴史を誇る児童文化実践サークル「うぶ」は、小学校での学童保育や地域の夏祭り、児童館でのイベントなど地域に根差した活動を続けている。子供たちの屈託のない無邪気な笑顔と触れ合うことは、何物にも代えがたいものと日々感じているそう。代表の竹下さんと副代表の豎山さん、前代表の林さんに話を聞いた。

●学童保育や地域のイベントに東奔西走

「はい！皆で仲良くなれるおまじないをしまーす！」「せーの！」「パン！パン！グー！」

明るい笑顔と元気な声で子供たちの興味を一身に集めるのは、児童文化実践サークル「うぶ」のメンバーたち。「小学校の学童保育にお伺いした時、最初と最後に必ずするお決まりのあいさつなんです」と話すのは、この4月から代表になった竹下さんだ。

「うぶ」は創設から約60年という長い歴史を持つ。吹田市内の小学校の学童保育でのボランティアが活動のメイン。そこで紙芝居や人形劇、ペープサート(紙の人形劇)、ミニゲームなど、子供たちが楽しく過ごせるようにアクティビティを提供している。また、地域の公民館や児童館からは、イベントやお祭りなどの運営を手伝ってほしいといった依頼が毎月のように入る。前代表だった林さんは「活動の場をいただけるのはうれしかったですね。節分の時には、児童館で豆を投げつけられる鬼役もしました」と、その時のことを楽しそうに話す。



▲サークルのマスコット
パングーちゃん



●前代表 林 功一郎さん



鬼の登場で大盛り上がりだった節分のお楽しみ会

●ボランティアはもっと身近にできること

全員が入部前からボランティアに携わってきたわけではなく「大学に入って初めて」と話すのは竹下さんと豎山さん。「子供が好きで、直感で入りました」(豎山さん)。「私は教育に関心があったので、子供たちにフォーカスした活動をしていると知り入りました」(竹下さん)。一方の林さんは「僕はもともと、自分の行動で人が笑顔になることが好きでした。子供たちに笑顔届けられる活動内容を知って“これだ！”と思いました」と入部当時を振り返る。

「満面の笑顔でかけ寄ってきてくれるのが、もう可愛くてキラキラしていて、こちらも元気をもらえます」(竹下さん)。「皆がすごい勢いで遊びに誘ってくれるんです。それがとても新鮮で、うれしくて自然と笑顔でしまいました」(豎山さん)。実際に活動を始めたことで、ボランティアそのものへのハードルが下がったと感じている3人。実は誰もが気軽に参加できる、身近なものだと気付いたそうだ。



●副代表 豎山幸太さん



▲吹田市立子育て青少年拠点 夢つながり未来館(ゆいびあ)開催の「第12回ゆいびあ夏まつり」にボランティアで参加



▲ボランティア活動での学内表彰

しかし活動は順調なことばかりでなく、失敗したり悩んだりすることも。豎山さんは、紙芝居や人形劇に興味がない子供や遊びの輪に入りがたらない子供の興味を引き付ける方法を模索中だ。また、竹下さんはジェスチャーゲームでの苦い思い出がある。「人手が足りなくて数十人のクラスに一人で行った時のことですが、子供たち皆の希望に応えきれなくて、何度も頭の中でシミュレーションして準備していたのに上手くできず、反省しました」。そんな時は学童保育の指導員らと行う反省会で相談し、アドバイスをもらう。そこでの学びや新たな発見が次に生かされるそうだ。

特に低学年の子供は夢中になると周りが見えなくなることがあるため、一緒に楽しんで遊ぶだけでなく、大人として安全面での責任を持つことも意識していると林さんは言う。「例えば靴ひもがほどけたまま走って転倒の恐れがないか、暑い日に水分補給せず脱水になっていないかなど、僕たちと過ごした時間が皆笑顔で終わるように、細やかな部分まで配慮することも大切だと思っています」。

●細やかな活動が実を結び、心が通い合う

そんな楽しい時間を重ね、今では顔なじみの子供たちも増えた。「あ、『うぶ』の人だ」と再訪時に顔や名前を覚えてくれているのも喜びの一つ。丁寧に気持ちの通い合う活動を続けていることで、思い出だけで心が温かくなるような経験もたくさんできた。

「初めて参加した時に、緊張して立ち尽くしていたら、子供の方から声をかけてくれました。『新しく来た人？これあげる』と折り紙をくれたんです。それ以来、行くたびに折り紙や、『だいすき』『おぼえていてね』と書いた手紙をくれるようになって。子供からの贈り物は私の宝物です」と竹下さんは素敵なつながりを教えてくれた。また子供たちを取り巻く地域の大人たちとも新たな交流が生まれ、豎山さんは「ボランティア活動をしたことで、自分の世界も広がった」と実感している。

今年から新しい仲間も増え、現在は20人以上で活動している。前代表の林さんからは「今年は均等に活動の内容を分担して、皆で助け合いながら頑張っている印象ですね。安心して任せられます」とのお墨付きだ。「今は週に1回、水曜日のみの訪問ですが、他の曜日にも新しい活動ができれば」(豎山さん)。「メンバーが新たにやってみたいと思うことを、どんどん実現していきたいです。皆と一緒に活動を広げていきたいです」(竹下さん)。先輩たちから引き継いだ交流のバトンが、笑顔と共に次世代へつなげていく。



●代表 竹下明里さん

■研究最前線

国際化政策論の研究 • Research on Internationalization Policy

国際協力活動における理論と実践のリンケージ

支援の現場で学ぶ実践型プログラムを確立

Bridging Theory and Practice in International Cooperation :

Establishing a Service-Learning Program through Field-Based Support Activities

●国際部 澤山 利広 教授

• Division of International Affairs — Professor *Toshihiro Sawayama*



▲トルコ・国際緊急援助隊での病棟テントメンテナンス作業
Ward tent maintenance by the Japan Disaster Relief Team in Turkey



▲澤山教授の著書・共著
Books authored by Professor Sawayama

戦争や紛争、自然災害、感染症、貧富格差の拡大など、国境を越えた地球規模の課題は後を絶たない。こうした国際情勢の中、日本の国際協力・国際支援の役割はますます重要性を増している。国際部(副部長・欧州センター長)の澤山利広教授は、ブータンでの青年海外協力隊(現・JICA海外協力隊、以下「JOCV」)の活動を原点に、大地震の被害を受けたトルコでの国際緊急援助隊やアルメニアでの選挙監視など多くの現場に立ち続けてきた。関西大学では「国際協力サービスラーニングプログラム」科目群を担当し、学内の国際化を推進するとともに、支援活動を通じて学生が社会人基礎力や国際社会で生き抜く力を身に付け、グローバルイシュー解決に貢献する人材育成を担っている。

Global issues that transcend national borders including wars and conflicts, natural disasters, infectious diseases, and widening socioeconomic disparities, continue to pose significant challenges to the international community. In light of these global circumstances, Japan's role in international cooperation and development assistance is becoming ever more important.

Professor Toshihiro Sawayama, Vice Dean of International Affairs and Director of the Kansai University European Centre, has long been committed to fostering international cooperation through education, research, and global engagement. His dedication to international cooperation traces its roots to his service as a Japan Overseas Cooperation Volunteer (JOCV) in Bhutan. Since then, he has worked on the front lines of numerous international initiatives, including deployment with the Japan Disaster Relief Team following the devastating earthquake in Türkiye and participation in election observation missions in Armenia.

At Kansai University, Professor Sawayama teaches courses in the International Cooperation Service-Learning Program and serves as a key leader in the university's internationalization efforts. Through experiential learning and practical engagement in international cooperation activities, he empowers students to develop essential professional skills, intercultural competence, and resilience. By bridging academic learning with real-world experience, he fosters the next generation of globally minded leaders capable of addressing pressing global challenges and contributing to international development and cooperation.



●JOCVと国際協力サービスラーニングの連環

Linking JOCV with international cooperation service learning



■2つの原体験が導いた国際支援研究

— 専門分野について教えてください。

専門は開発経済学です。個人的には国際化政策論とも位置付けています。途上国を支援する国際協力と、国内も含めた被災地支援に関心があり、海外と国内の経験を互いに生かせる循環型支援政策の研究に取り組んでいます。

— 研究を始められたきっかけは何だったのでしょうか？

原点は2つの体験にあります。1つは、大学卒業後にJOCV隊員としてブータンで2年3か月ほど活動したこと。大学時代からバックパッカーとして世界各国を旅するなど海外に興味がありました。ブータンでは、ブータン王立大学の学生を対象にスポーツ指導をしました。ちなみに現在、ブータン王立大学は関西大学の協定校です。一般に途上国の学校教育では、国語や数学などの主要科目が優先され、体育や音楽などの情操教育は後回しにされがちです。日本の国際協力の特徴の1つは、こうした情操教育の充実に向けた取り組みです。「幸せの国」と言われるブータンですが、当時は乳幼児死亡率も高い最貧困国です。現地の大学生たちは、自国の将来を真剣に考え、真摯に学びに向き合っていました。その姿勢を目の当たりにして、自分自身の生き方を考え直し、もう一度勉強して国際協力の専門家になりたい。困難に直面している人々を支援したいと思ったことが出発点です。

— もう1つの原点は何ですか？

もう1つは、阪神・淡路大震災です。JOCVでの活動を終えて帰国し、大学院に進学した翌年、1995年1月に阪神・淡路大震災が起きました。その翌日から8月頃まで、芦屋や神戸で支援物資輸送などのボランティア活動を続けました。国内における被災地支援の重要性に目を開かれたこの経験が2つ目の原点です。2023年2月のトルコ・シリア地震では、JICA国際緊急援助隊の医療コーディネーターとして、トルコで活動しました。

■国際協力活動に参加した教員の離職を防ぐ

— 現在の研究テーマについて教えてください。

長期の海外ボランティアと短期のサービスラーニングの相互補完が研究テーマです。JOCV活動と学生の短期国際協力ボランティア活動を連携させることで、それぞれの活動の質的向上を目指す研究です。

JOCVは2年間にわたる長期の活動ですが、教員が休職して隊員となり、帰国後に復職した「OV教員」の離職率が高い点に着目しました。海外で得た経験を教育現場に十分に還元することなく、離職してしまうのは大きな損失です。OV教員の離職を防ぐためのキャリア形成サポートシステムを構想し、まずは対面インタビューとアンケート調査を実施しました。全国の現役隊員、OV教員、離職したOV教員ら100人以上から、派遣期間中の気持ちの変化や帰国後の適応状況、離職原因などを聞き取り、離職後のキャリアの事例も収集しました。調査の結果、主な離職原因は労働環境や待遇への不満もありましたが、意外だったのは、海外での経験や培ったスキルを評価してくれる理解者が職場に1人でもいれば、離職を防ぐことができた可能性があるという点です。

■Two Formative Experiences That Led to a Career in International Assistance Research

— Tell us about your area of specialization.

My specialty is development economics. Personally, I also regard it as internationalization policy theory. I am interested in international cooperation to support developing countries and in providing assistance to disaster-stricken areas, including in Japan, and I'm engaged in research on cyclical assistance policies in which overseas experience is applied domestically and vice versa.

— What inspired you to begin your research?

My interest in this field stems from two formative experiences. The first was my service as a member of JOCV in Bhutan for approximately two years and three months after graduating from university. Even during my student years, I was fascinated by the wider world and traveled extensively as a backpacker, which sparked my interest in international affairs and cross-cultural engagement.

In Bhutan, I provided sports instruction to students at the Royal University of Bhutan, the country's only university at the time. Incidentally, the Royal University of Bhutan is now one of Kansai University's partner institutions, making this connection particularly meaningful to me. In many developing countries, limited educational resources are often directed toward core subjects such as language and mathematics, while physical education, music, and other forms of holistic education tend to receive less attention. One distinctive feature of Japan's international cooperation has been its emphasis on supporting these aspects of education, recognizing their importance in fostering well-rounded personal development and enriching students' quality of life.

Although Bhutan is often referred to as the "Land of Happiness," it was then one of the world's least developed countries, with a high infant mortality rate and many development challenges. What impressed me most was the attitude of the university students I met there. They were deeply committed to learning and genuinely concerned about the future of their country. Witnessing their dedication prompted me to reflect on my own life and aspirations. It inspired me to return to academic study, pursue a career as a specialist in international cooperation, and devote myself to supporting people facing difficult circumstances. That experience became the starting point of my academic and professional journey.

— What was the other starting point?

The other starting point was the Great Hanshin-Awaji Earthquake. In January of 1995 - the year I returned to Japan after completing my JOCV activities and entered graduate school - the Great Hanshin-Awaji Earthquake occurred. The very next day I signed up to participate in volunteer activities, such as transporting relief supplies in Ashiya and Kobe, and continued until around August. This experience, which opened my eyes to the importance of disaster support in Japan, was what provided the second starting point for me. After the earthquake that hit Turkey and Syria in February 2023, I joined the JICA Japan Disaster Relief Team in Turkey in the role of medical coordinator.

■Preventing Teacher Volunteers from Leaving the Profession

— Could you tell us about your current research?

My current research focuses on the complementary relationship between long-term international cooperation volunteering and short-term service-learning programs. Specifically, I examine how collaboration between the JOCV program and students' short-term international volunteer activities can enhance the effectiveness and educational value of both.

The JOCV program involves overseas assignments of approximately two years. In my research, I became particularly interested in the relatively high attrition rate among teachers who take a leave of absence from their schools to serve as JOCV members and later return to the teaching profession. These individuals, often referred to



■研究最前線



リコーダーの発表会 Recorder recital



▲情操教育として習字を子どもたちに教える学生たち Students who teach calligraphy to children as part of emotional education



▲カンボジアのアヌワット小学校で学生や汗を流した仲間たちと/ With friends and colleagues who worked side by side with our students at Anuwat Primary School, Cambodia

■リアルな現場で国際協力の本質を実感

— JOCV 隊員と学生たちの活動をどのように連携させたのでしょうか？

学生を対象とした短期の国際協力サービスラーニングは、ボランティア活動を中核に事前研修と事後の振り返りで構成されたプログラムです。コロナ禍以前には、フィリピンをはじめとする地域で、情操教育協力活動の一環として、子どもたちにリコーダーを教える教授メソッドを整えました。コロナ禍以降は、活動をカンボジアにも広げ、神戸市から派遣された JOCV の小学校教諭と協働しながら、現地の小学生にリコーダー指導や公衆衛生指導などを行っています。参加学生は、隊員と連携することで単なる見学・体験にとどまらず、リアルな技術協力の最前線で、さまざまな能力や知識、行動力を身に付けることができます。一方で現地の隊員は学生たちとの協働で、より多くの児童を対象にし、体育祭や文化祭などの大きなイベントを実施することができるのです。

日本の学生の多くは学業だけではなく、クラブ活動でスポーツや音楽などにも取り組む「二本足」の経験を持っており、それが情操教育の支援において力を発揮します。滞在の最終日には、現地の子どもたちによるリコーダーの演奏会を開催します。達成感に溢れた子どもたちや感動した父母、現地の教員や地域の人々から「必ずまた来てほしい」と声を掛けられ、学生たちは国際協力の醍醐味を味わいます。事前に学習した技術移転に必要なカンボジアの公用語・クメール語の日常会話や身振り手振りで臨機応変に奮闘し、成長していく学生の姿を見ることができるとは、私にとっても大きな喜びです。

■関西大学から国際協力文化を発信

— この教育プログラムは隊員の教員と学生にどのような効果があるのでしょうか？

学生は、帰国後の報告書作成やプレゼンテーションなどの体験の文字化・言語化・映像化のプロセスを通じて、例えば、文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロースが『野生の思考』で論じたような、限られた材料や道具を柔軟に組み合わせながら新たな価値を創造する力を身に付けたことを確認します。その過程は、自己と社会の課題を認識し、自らの将来を展望する作業でもあります。実際に、JOCV への応募や教職を志すようになる学生も少なくありません。

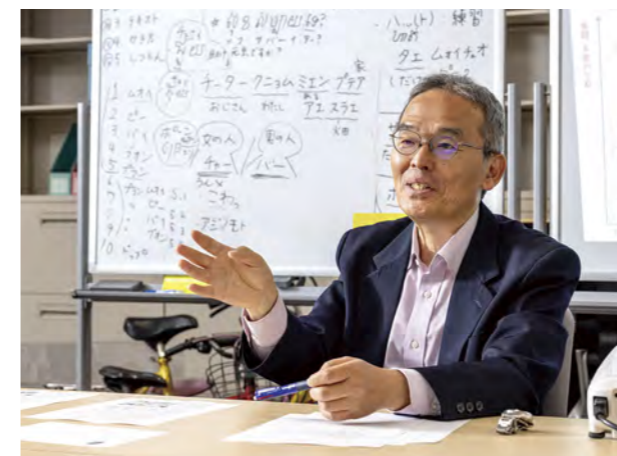
OV 教員にとっては、任地における学生等との協働経験が、帰国後の社会還元や、自らのキャリアの継続・発展のモチベーションにもなります。JOCV のシステムとしても、開発成果の最大化を目指す協働と帰国後研修を重視する短期サービスラーニングの手法は、示唆に富むと思われます。

— 今後、力を入れたい取り組みについても教えてください。

この教育プログラムを社会人のリカレント教育にも展開したいと考えています。大学が行う国際協力活動には、学外の関係者のお力添えが不可欠です。これからも学生たちや産官学民の連携で、対等なパートナーシップによる国際協力を続け、その文化を関西大学から社会に発信していきたいです。



▲サラヤ株式会社と連携した手洗い指導 Handwashing instruction in cooperation with Saraya Co., Ltd.



as former volunteer (OV) teachers, possess valuable international experience and skills. When they leave the profession without fully applying those experiences in educational settings, it represents a significant loss for both schools and society.

To address this issue, I developed a concept for a career support system designed to help former volunteer teachers successfully reintegrate into their professional careers. As a first step, I conducted in-depth interviews and questionnaire surveys involving more than 100 participants, including active JOCV members, former volunteer teachers who had returned to teaching, and those who had subsequently left the profession. The study explored changes in their perspectives during overseas service, their experiences of readjustment upon returning to Japan, and the factors that contributed to their decisions to remain in or leave the profession. I also collected case studies of their post-service career trajectories.

The findings revealed that dissatisfaction with working conditions and employment was a major factor behind teachers' decisions to leave. However, one particularly unexpected finding was that attrition might have been prevented if returning teachers had even a single colleague or supervisor who understood and valued the experiences and skills they had gained overseas. This suggests that professional recognition and institutional support can play a crucial role in helping former volunteers continue their careers and contribute their international expertise to the educational community.

■ Experiencing the True Essence of International Cooperation in the Field

— How did you integrate the activities of JOCV members and university students?

Our short-term international cooperation service-learning program combines volunteer activities with pre-departure training and post-program reflection. Before the COVID-19 pandemic, we conducted programs in countries such as the Philippines, where we developed a teaching methodology for recorder instruction as part of our efforts to support holistic education. Since the pandemic, we have expanded these activities to Cambodia. There, we collaborate with a Japan Overseas Cooperation Volunteer (JOCV) elementary school teacher dispatched from Kobe City, working together to provide recorder lessons and public health education for local primary school students.

By working alongside JOCV members, participating students gain far more than a brief volunteer experience or cultural exchange opportunity. They engage directly in the realities of technical cooperation on the ground, developing practical skills, knowledge, adaptability, and initiative. At the same time, collaboration with university students enables JOCV members to reach a larger number of children and organize major events such as sports festivals and cultural

festivals that would be difficult to implement on their own. Many Japanese students have what I describe as a “dual-track” background, balancing academic studies with extracurricular activities such as sports, music, or the arts. These experiences prove particularly valuable when supporting holistic education initiatives in developing countries.

On the final day of the program, local children perform a recorder concert to showcase what they have learned. Seeing the children's sense of accomplishment, the emotional reactions of their parents, and hearing local teachers and community members say, “Please come back again,” allows our students to experience the true rewards of international cooperation firsthand.

Before departure, students learn basic conversational Khmer, Cambodia's official language, as well as communication techniques necessary for effective knowledge transfer. In the field, they combine these skills with creativity, gestures, and determination to overcome language and cultural barriers. Watching them grow through these experiences and gain confidence as global citizens is one of the most rewarding aspects of my work as an educator and researcher.

■ Sharing a Culture of International Cooperation from Kansai University

— What impact does this educational program have on both volunteer teachers and students?

For students, the learning process does not end when they return home. Through writing reports, giving presentations, and documenting their experiences through written, visual, and digital media, they reflect critically on what they have learned. In doing so, they develop the capacity to create new value by creatively combining limited resources and opportunities—a concept reminiscent of what anthropologist Claude Lévi-Strauss described as *bricolage* in his influential work *The Savage Mind*. This process also encourages students to reflect on both social challenges and their own future aspirations. Many participants gain a deeper sense of purpose through the program, and it is not uncommon for them to go on to apply for the JOCV program or pursue careers in education and international cooperation.

For former volunteer teachers, collaboration with university students during their overseas assignments can provide a strong source of motivation for continuing their professional development and contributing to society after returning to Japan. These experiences reinforce the value of their international service and help them envision pathways for applying their knowledge and skills in their subsequent careers. From the perspective of the JOCV system itself, the service-learning approach offers valuable insights. Its emphasis on collaboration, maximizing development outcomes through partnerships, and structured post-program reflection aligns closely with the broader goals of sustainable international cooperation and human resource development.

— What initiatives would you like to focus on in the future?

Looking ahead, I hope to expand this educational model beyond university students and apply it to recurrent education and lifelong learning opportunities for working professionals.

International cooperation activities undertaken by universities depend heavily on the support and collaboration of partners outside academia. Therefore, I would like to continue promoting international cooperation based on equal partnerships among students and stakeholders from government, industry, academia, and civil society.

My hope is that, through these collaborative efforts, Kansai University can continue to foster and share a culture of international cooperation with the broader society, inspiring more people to engage in addressing global challenges through mutual learning and partnership.



Topics ■トピックス [学内情報]

◎ 関大愛全開！ 全国に関大の魅力を伝えたい

山里亮太さんが「卒業生アンバサダー」に就任

「山ちゃん」の愛称で知られる南海キャンディーズ・山里亮太さん(2001年文学部卒業)が、初代「関西大学卒業生アンバサダー」に就任した。

山里さんはテレビやラジオ、執筆活動など多方面で活躍。その親しみやすい人柄と卓越した発信力で、世代を超えて多くの支持を集めている。今後は卒業生としての視点を生かし、各種行事への出演、広報媒体の取材対応などを通じて、本学の認知度向上に寄与していく。アンバサダー就任にあたり、山里さんは「ここからスタート。大学としっかり連携しながら、全国に関大の魅力を伝えたい」と意気込みを語った。

また、4月5日には卒業生が集う「関西大学校友会ホームカミングデー」が千里山キャンパスで開催され、山里さんの就任式と、初仕事となるトークショーが行われた。

当日は約6,000人が来場。山里さんは持ち前の話術で学生時代の思い出や“関大愛”を炸裂させ、会場を笑いの渦に。在学生に向けては「迷ったら、まず“やる”を選んでほしい。一步踏み出せば、返ってくる楽しさや経験が関大には山ほどある」とエールを送った。



1 卒業生アンバサダー就任式で田中義信校友会会長から委嘱状を贈呈される山里さん
2 満開の桜に彩られた千里山キャンパスで開催された「関西大学校友会ホームカミングデー」
3 放送研究会の学生とのトークイベント

◎ 「ふるさと納税」制度を活用した新たな支援のかたち

大学オリジナル返礼品付き寄付の受付を開始

関西大学は吹田市と連携し、4月から同市の「ふるさと納税」制度を活用した寄付の受付を始め、6月には大学オリジナル返礼品付き寄付も開始した。

本取り組みは、単なる寄付にとどまらず、教育・研究・人材といった本学の資源を生かした返礼品を展開することで、大学と地域の双方に資する新たな支援の仕組みを提案するもの。

客員教授による講演会の特別聴講や、学長・理事長によるキャンパスツアーなどを通じて、寄付者に関西大学ならではの「知」や「学び」、学生たちの活気あふれるキャンパスを体感できる内容となっている。また、研究成果から生まれた産学連携商品など多彩な企画を展開し、ふるさと納税をきっかけとした大学との新たなつながりの創出を目指す。

関西大学 × ふるさと納税

ふるさと納税 特設サイト ▶
 ●申し込みはこちらから

関西大学学生食堂
お食事クーポン

関西大学内の学生食堂で
利用可能

¥500

関西大学理事長または学長による
キャンパスツアー

関西大学の研究から生まれた
「九・九割蕎麦」

「KANDAI BLEND」
ドリップコーヒー

関西大学客員教授による
講演会聴講権 (全6回)

6/25※ 池上 彰氏
●ジャーナリスト
「国際情勢を理解するために」

10/6※ 高谷 光信氏
●ウクライナ・チェルニーヒウ
フィルハーモニー交響楽団 常任指揮者
一般社団法人 日本ウクライナ音楽協会 理事長
「戦争と音楽
～ウクライナ・ロシアの音楽界の今～」

10/28※ 森川 裕一氏
●奈良県明日香村 村長
「飛鳥の謎を解き明かす」

11/5※ 藤田 貴久氏
●朝日放送テレビ報道局
テレメンタリー事務局 局長
「実録 北朝鮮の日本人
～“底穴に入らずんば”の立ち位置～」

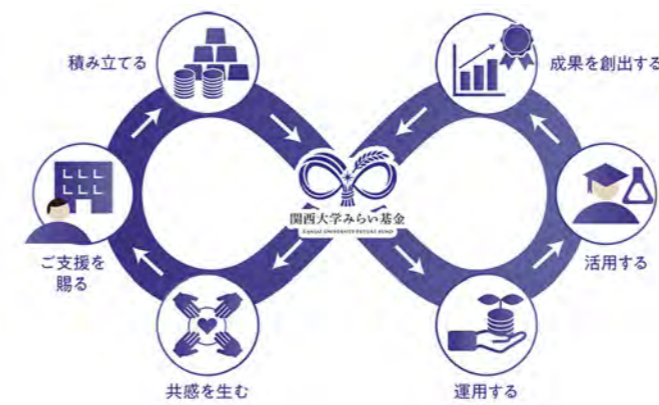
11/12※ 片岡 愛之助氏
●歌舞伎俳優
「伝統と挑戦」

12/17※ 藤原 紀香氏
●俳優
NPO法人 SmilePlease 世界子ども基金 主宰
「Smile Please —アフガニスタンで出会い、
カンボジアで学んだ「教育と未来」—」

※講演テーマは変更の可能性があります。

◎ 新たな大学経営モデル、自立型財源づくりへの取り組み

エンダウメント型基金「関西大学みらい基金」を創設



関西大学みらい基金
KANSAI UNIVERSITY FUTURE FUND

「葦・つなぐ・光」を融合
しなやかに流れる曲線は、人々の想いが循環し、
次世代へ繋がっていく「持続的な支援」を象徴しています

関西大学
みらい基金
特設サイト

関西大学は創立140周年を迎える本年を節目とし、学園の将来における安定性と持続可能性を高めることを目的に、第3号基本金となるエンダウメント型基金「関西大学みらい基金」を新設した。

海外の有力大学で盛んな「エンダウメント型」の経営は、寄付金などの原資とその運用益によって恒久的な教育研究活動を支える仕組み。日本でも基金導入は進み出しているものの、本基金の設立は第3号基本金として明確にエンダウメントをうたう、関西の私立大学では先駆的な取り組みとなる。これにより、本学は従来の学費や補助金に依存した財務構造からの転換を図り、長期運用による利益を再投資することで基金を持続的に拡充し、外部環境に左右されない独自の経営基盤を強化していく。

運用は6月にスタートし、学園関係者はもとより、志ある企業や個人、地域社会など、多様なステークホルダーに広く理解と賛同を呼び掛けている。まずは創立150周年を迎える2036年度の150億円以上をマイルストーンとし、安定的かつ自立的な財政基盤を確立し、将来的には1,000億円規模の発展を見据え、より強固で持続可能な大学経営基盤の構築を推進していく。

◎ 新設の「寄付型共創研究制度」適用第1号

「パブリック・イノベーション研究センター」を設立

関西大学は2026年度に新設した「寄付型共創研究制度」の適用第1号として、「パブリック・イノベーション研究センター」を総合情報学部(高槻キャンパス)に設立し、4月1日から3年間にわたる研究活動を始動した。

「寄付型共創研究制度」は、学部等の裁量・方針のもと、企業等からの寄付により研究室を立ち上げ、企業の事業としては展開が難しい長期的テーマや社会的課題に、大学の知見・人材・設備などのリソースを活用して取り組むもの。

本センターでは、政府の政策変化や組織変革を通じ、関係する民間企業のイノベーション創造を促す取り組みを「パブリック・イノベーション」と定義。企業寄付を活用した産学連携による新たな研究モデルのもと、公共分野における社会課題解決に資する研究を推進し、関西地域の経済界・産業界・自治体など、広く社会に向けて研究成果を発信していく。

共創研究代表者には、本学客員教授で経済学者の竹中平蔵氏が就任。招へい教授6人と学内の研究者を合わせた9人体制でスタートし、主な研究テーマとして3つを掲げている。

関西大学寄付型共創研究 概要

寄付の目的を大学のリソースにより具現化

大学
学部、研究科
研究系等に設置

学部等の裁量・方針による
自由度の高い運営

- 研究施設の使用、設備の整備
- 企業等から研究者の受入れ (特命教員、招へい研究者) ※
- 研究室名に企業等名を表示
- 企業からの研究者による研究指導等教育活動

※出向等による

目的・寄付

企業・団体、
個人等

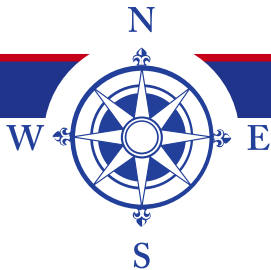
「資金」「研究課題」「研究者」を大学に誘致
社会ニーズにこたえる課題設定 (学の実化)

●研究テーマ

- ① 諸外国のPPP/PFIに関する取り組み事例とその成果
- ② 諸外国の政府調達改革に関する取り組み事例とその効果
- ③ 関西圏の政策課題解決に資する諸外国政府の取り組み事例と想定される効果 ほか。

KANDAI NEWS

■ 関大ニュース



日本初、グリーンエレクトロニクス工学科を開設

関西大学は4月、日本初となる「グリーンエレクトロニクス工学科」をシステム理工学部に新設した。本学科は、持続可能な社会に貢献する「グリーン」と、ハードウェア・ソフトウェアの基盤となる、電子工学技術「エレクトロニクス」を融合。半導体の設計、製造、応用を「環境」の視点も踏まえて体系的に学べる点が大きな特色だ。具体的には、スマートフォンやEV(電気自動車)などに搭載の半導体デバイスを中心に、ハード・ソフトの両面から、資源循環を意識した原料、低消費電力の集積回路設計、その回路を用いたエネルギー効率の高いAIアルゴリズムの開発などを研究する。

2026年度入学式を挙行 新入生歓迎の集い・歓迎行事も開催



4月1日、2026年度関西大学入学式を千里山キャンパスにて挙行し、約7,300人の新入生が大学生活をスタートさせた。入学式に先立ち3月29日、一人暮らしを始める新入生を対象に、学生同士の交流をサポートする「新入生歓迎の集い2026」を開催。今年は、人間健康学部で非常勤講師を務める落語家の桂三幸氏がゲストとして登壇。大阪の魅力や大阪人の気質、ツッコミの文化についてユーモアを交えて語り、会場は大きな笑いと拍手に包まれた。

さらに、新入生歓迎オリエンテーションでにぎわう4月3日には、「スポーツでつながろう！新入生歓迎マッチ」を開催し、本学体育会バレーボール部と同志社大学体育会バレーボール部が対戦。結果は1-1の引き分けとなったが、両チームの熱戦により会場は大いに盛り上がった。

関西大学第一高等学校に新校舎「黎明館」が誕生

4月3日、関西大学第一高等学校にて新校舎「黎明館」の竣工式および内覧会を開催し、学校関係者など約100人が出席した。

RC造・地上5階建ての新校舎は、館内中央に設けられた4層吹き抜けの共用空間が特徴。日常の交流や活動成果の発表など、多目的な活用が期待される。学年集会にも対応できる規模の講堂には、文化系クラブの活動に利用できるステージを備えるなど、生徒たちの多様な学びを支える新たな環境が整っている。



関大一高新校舎「黎明館」の外観



開放感あふれる館内中央の吹き抜け

おすすめ図書「新入生に贈る100冊」を発表

関西大学は、大手書店の丸善雄松堂、紀伊國屋書店、ならびに本学学長による「新入生に贈る100冊」(2026年版)を選定し、新入生約7,300人に案内。大学生生活のスタートにあわせて読書的重要性を呼びかけた。

今年で9年目を迎えるこの取り組みは、本学独自の読書啓発企画。選書された100冊は、高橋智幸学長の推薦図書20冊に加え、丸善雄松堂、紀伊國屋書店の推薦図書各40冊で構成されている。



関西大学体育会が大活躍！

野球部 6月8日から14日、第75回全日本大学野球選手権記念大会が明治神宮野球場および東京ドームで行われ、決勝で関西大学は慶應義塾大学に2-1で勝利。1972年大会以来54年ぶり3度目の優勝を果たした。また、最高殊勲選手賞には米沢友翔さん(人間健康学部4年次生)が選ばれた。



▲優勝し、胴上げされる小田監督

陸上競技部 6月12日から14日、第110回日本陸上競技選手権大会が愛知県・パロマ瑞穂スタジアムで行われ、男子800mで萬野七樹さん(社会学部3年次生)が1分46秒45の好タイムで初優勝を飾り、アジア大会日本代表に内定した。関西大学が日本陸上競技選手権大会で優勝を飾るのは76年ぶりとなる。



写真提供: 野球部

KANSAI UNIVERSITY SOCIAL MEDIA

